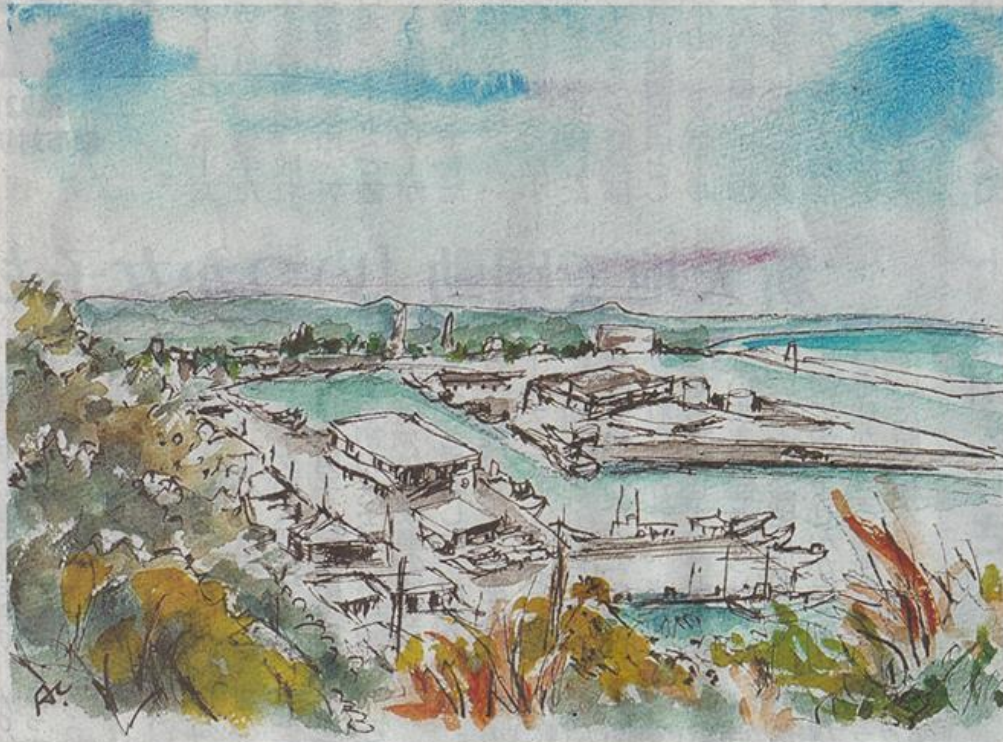


大原港全景



雑賀崎にルーツを持つ「長福丸」

絵と文・熱田親憲 題字・熱田素華

紀伊・房総

くろしお物語

◇18◇

今年の2月、「最後 市に続いて紀州・雑賀の紀州漁民ふたり」で崎から大原町(現千葉タイ釣り名人・中口佐 県・いすみ市)に住み

付いて「遊漁船」で大れ、「長福丸」3艘の代表として、観光漁業を紹介した。今回は雑賀崎の中井家とは分家の関係になる「藤井家」の末裔の房州漁師・藤井敏昭さんを大原港近くの自宅を訪ねた。彼は戦後大原町で生ま

れ、「長福丸」3艘の根まで水深50㍎の浅瀬が続く、漁場として最高の地理的条件であることから今日に至っている。昭和の初めに勝浦に移住し、勝浦で敏昭さんの父・俊雄さんが1933(昭和8)年に生まれ、敏昭さんは戦後の1953(昭和28)年に大原で生まれた。タイ釣りは「ビシマ漁法」という方法を使い、100㍎のナイロムに上手に乗ったからだ。その背景は山田洋次監督の映画「釣りバカ日誌」が大きく影響している。週末はまる

釣りレジャーなお健在

があると聞いて遠征し、勝浦港に入港するようになり、やがて勝浦(現勝浦市)に移住。その後、鯛の漁場を求めて北上し、御宿沖の漁場を見つけ、岩礁地帯の器械根(面積120平方㍎)にたどりついた。器械根から勝浦港に戻るには時間がかかり過ぎるので大原港に入港するようになり、やがて大原に移住した。大原港から器械

ンの糸にビシという音を500ほど嘯みつけた流し糸の先に、タイカプラと釣り針をつけ、針に鯛の小エビをつけてエコロジをついてエコロジにかなっている。船上から釣り糸を垂らして、海底50〜100㍎アツプのところに餌が流れるようにする漁法である。

今日までこの漁法が継続できたのは、「つり船」がレジャーブー

野を感じた。